

〔研究ノート〕

学生とその他の年代における挙式スタイルの選択意識の違い —他者への意識とリゾートウェディングの選択に注目して—

松本大吾

1. 本研究の目的

現在の結婚式の挙式スタイルとして最も一般的なものは、居住地近隣の専門式場やホテルで実施することである。一方で、ハワイなどの海外リゾート地や、沖縄や軽井沢などの国内リゾート地など、居住地とは異なる場所での結婚式、いわゆるリゾートウェディングを選択するカップルもいる。

リクルートマーケティングパートナーズ(2020)の調査報告書である『ゼクシィ結婚トレンド調査2020 首都圏版』によれば、2019年度に挙式または披露宴・ウェディングパーティを実施した回答者911名のうち、国内や海外のリゾート地での挙式を実施した人の割合は14.2%であった。こうした数字からはリゾートウェディングを選択する人が少数派であることが分かる。では、それぞれの挙式スタイルを選択する人とはどのような人なのだろうか。

リクルートマーケティングパートナーズ(2020)によると、国内、海外に関わらずリゾート地での挙式をしなかった理由の上位には、列席者(出席者)や親への配慮が挙げられている。また、増田(2011)では、リゾートウェディングを志向する消費者の傾向としてはあるが、やはり列席者への配慮や親の影響が指摘されている。こうしたことから、挙式スタイルの選択は、単に挙式をする本人たちの意思だけではなく、列席者や親などの他者の影響があることが分かる。

ただし、こうした列席者や親などの他者の存在は、実際に挙式する予定がある場合はもちろん、いわゆる「結婚適齢期」と呼ばれるような年齢に近づいた場合など、自分の結婚や結婚식을現実的に想像する状況になって初めて意識されることだと考えられる。例えば、厚生労働省(2020)の『令和元年(2019)人口動態統計(確定数)の概況』によれば、平均初婚年齢は夫31.2歳、妻29.6歳であった。前出のリクルートマーケティングパートナーズ(2020)の挙式実施者に対する調査における回答者の平均年齢も、同様に30歳前後であった。つまり30歳を境として、それよりも年齢が若いほど結婚を現実の選択として意識せず、一方、30歳以降であるほどに結婚を現実のものとして意識する可能性がある。すなわち、年代によって意識の差があり、結果として挙式スタイルの選択が異なる可能性があるのではないだろうか。

以上のような問題意識のもと、年代によって挙式スタイルに対する選択意識が異なるのかを、未婚の消費者を対象に収集したデータに基づき確認する。特に、結婚や結婚식을現実的なものとして捉えることがないと考えられる学生に注目し、その他の年代(20代、30代、40代)と挙式スタイルの選択意識の違いがあるのかを確認する。

なお、結婚式に対する意識は男女でも異なる可能性がある。一般に結婚式は女性の方が、関与が高いものとして捉えられている⁽¹⁾。したがって、年代に加えて性別をもうひとつの分析軸とする。

2. リゾートウェディングの実施状況

リゾートウェディングとは「リゾート地で行う結婚式のこと」である(増田 2011)。増田(2011)はリゾート地を、心身をリラックスする目的のために非日常性を求めて訪れる場所であると指摘する。そのうえで、リゾート地で挙式することの利点として「結婚する人たちの居所や実家のあるエリアとは違う、非日常的なリゾート地で挙式することで現実世界と切り離され、わずらわしい義理に縛られず、少数数のアットホームウェディングを実現できること」があるという。

リクルートマーケティングパートナーズ(2020)による報告書、『ゼクシィ結婚トレンド調査2020 首都圏版』では、国内リゾート挙式及び海外挙式の検討・実施状況がまとめられている。当該調査の対象者は首都圏(一都三県)における、結婚情報誌『ゼクシィ』の読者およびネット会員のうち、2019年4月～2020年3月に挙式または披露宴・ウェディングパーティを実施した人であり、集計サンプル数は911名であった⁽²⁾。回答者の結婚時の年齢について、夫(=男性)は平均30.3歳であった。一方、妻(=女性)は平均28.5歳であった(以上の調査概要は同報告書 p. 5-6を参照)⁽³⁾。

まず、国内リゾート挙式について、「実際に国内のリゾート地で挙式をした」と回答した人は7.1%(挙式実施者885名中63名)であった(同報告書 p. 127)。海外挙式について、「実際に海外で挙式をした」と回答した人も7.1%(挙式実施者885名中63名)であった(同報告書 p. 123)。同報告書にはリゾート地以外の国内で挙式を実施した人の人数や割合に関する記載が明確にはないが、挙式実施者合計885名から国内リゾート挙式者63名、海外挙式者63名を除いた759名(全体の85.8%)がそれにあたると推測される。

なお、国内リゾート挙式について「具体的に検討したが行わなかった」と回答した人は1.8%、「少しは検討したが行わなかった」と回答した人は14.0%であり、「実際に国内のリゾート地で挙式をした」という回答を合わせれば、「検討者」は22.9%であった(同報告書 p. 127)。海外挙式については、それぞれ2.0%、21.8%であり、挙式実施者を含めた「検討者」の合計は31.0%であった(同報告書 p. 123)。

以上のデータからは、国内リゾート挙式と海外挙式の両方を検討した人の割合が分から

(1) リクルートマーケティングパートナーズ(2020)の調査では、質問票への記入を妻に依頼している。これも、一般的に男性(夫)よりも女性(妻)のほうが結婚式に対する関与が高いと考えられていることの傾向のひとつとして捉えられる。

(2) サンプル数は挙式及び披露宴・ウェディングパーティのいずれか、または両方を実施した人を対象としている。そのため、挙式実施者と、披露宴・ウェディングパーティ実施者に絞った集計の場合、サンプル数が異なる。

(3) リクルートマーケティングパートナーズ(2020)の調査回答者の結婚時の年齢区分ごとの割合について、夫は、24歳以下が5.5%、25～29歳が47.2%、30～34歳が28.3%、35歳以上が18.2%、無回答が0.8%であった。一方、妻は、24歳以下が10.8%、25～29歳が57.8%、30～34歳が23.6%、35歳以上が7.0%、無回答が0.8%であった。

ないため、国内と海外に関わらずリゾートウェディングを検討した人の総割合は不明である。ただ、少なくとも3割強の人がリゾートウェディングを検討していることが分かる。

言い換えれば、実際の挙式検討段階では、3割強がリゾートウェディングに興味を持っていた。ただ、国内と海外を合わせたリゾートウェディングの実施者は14.2%であり、挙式選択段階では、少なくとも半数以上がリゾートウェディングを実施していない。このことから、リゾートウェディングに興味を持ったとしても、何らかの理由で最終的な選択から除外されていることが分かる。

3. 挙式選択における列席者への意識

リゾートウェディングに興味を持ったとしても、最終的に選択しない理由には、予算面の問題もあるだろうが、結婚式という財の特殊性も影響していると考えられる。それは、列席者の存在である。挙式形式の選択は、最終的には結婚する男女の意思によって判断される。ただし、結婚式は基本的に結婚する男女のみで完結する財ではなく、列席者が参加することが前提とされている。すなわち、挙式形式の選択では列席者という、結婚する本人たち以外の他者に対する意識が働くと考えられる。

前出のリクルートマーケティングパートナーズ（2020）による報告書では、国内リゾート挙式を実施しなかった理由と、海外挙式を実施しなかった理由がまとめられている。国内リゾート挙式を検討したが実施しなかった人140名、海外挙式を検討したが実施しなかった人211名を対象に尋ねたところ、「多くの列席者を招待しなかったため」に対して国内リゾート挙式では32.1%、海外挙式では40.3%、「出席者の体力的な負担を考えて」に対して国内リゾート挙式では32.1%、海外挙式では39.8%、「出席者の金銭的な負担を考えて」に対して国内リゾート挙式では28.6%、海外挙式では32.2%が回答していた。これら3項目が国内、海外ともにリゾート地での挙式を実施しなかった理由の上位3項目として挙がっている（同報告書、p. 131 及び p. 126）。

同報告書では、挙式スタイルに関わらず、披露宴・ウェディングパーティを実施した地域を選んだ理由についてもまとめられている。披露宴・ウェディングパーティの実施者868名のうち「親・親族のアクセスがよいから」に対して59.1%、「友人のアクセスがよいから」に対して44.6%が回答しており、これらが上位2項目として挙がっていた（同報告書、p. 138）。

以上のようなデータからは、挙式スタイルや披露宴・ウェディングパーティの選択において列席者や親に対する意識が働いていることが伺える。このような他者に対する意識は、文脈は少し異なるものの増田（2011）でも類似した指摘がされている。

増田（2011）はリゾートウェディングを志向する消費者傾向について、ウェディングコーディネーターの聞き取り調査をもとに5つの変化を指摘した⁽⁴⁾。特に、列席者への意識に関わる指摘として「質重視」「友達親子」が挙げられる。

質重視とは、料理の質、式場スタッフの対応、アクセスの良さなどの質を求める傾向の

(4) 増田（2011）では本研究で引用したものの他に「イメージ先行の決定プロセス」「主体性の低下」「儀式性の喪失」というキーワードが指摘されている。

ことであり、その目的は「如何に列席者が楽しい時間を過ごすことができるか」を重視することであるという。「結婚式場の選択プロセスにおいては、列席者への配慮やおもてなしが重要なキーワード」だという(増田 2011, p. 148)。もう一方の友達親子とは、親子関係がより密接になり、親の意向が挙式選択に影響する傾向を表す(増田 2011, p. 154)。以上の増田(2011)の指摘からも、列席者や親といった結婚する本人以外の意識や希望が挙式の方法や在り方に反映されやすいことが分かる。

増田(2011)はリゾートウェディングを志向する(選択する)消費者を対象とした研究のため、リゾートウェディングを選択しない理由、あるいは居住地近隣での挙式を選択する理由を直接説明するものではない。ただ、リクルートマーケティングパートナーズ(2020)による調査報告と合わせて考えれば、挙式スタイルの選択において親を含む列席者に配慮する意識が影響する可能性は高い。特に、リゾートウェディングは居住地から離れた場所での挙式であるため、列席者への負担が重い。すなわち、列席者に対する配慮の気持ちが意識されるほどにリゾートウェディングが選択されず、居住地近隣での挙式が選択されるのではないだろうか。

ただ、そうした列席者に対する配慮の意識は、具体的に結婚や結婚式を想像するような状況になって初めて想起されるものだと考えられる。年代別で考えれば、学生の場合、恋愛経験の中で相手との結婚や結婚式を想像することはあるとしても、現実実施するものとして想起されることはないだろう。なぜならば、結婚ないしそれにまつわる消費行動は一定の条件(結婚を同意する相手の存在、家族などの周囲の人々から妥当だと思われる年齢、家計状況など)が揃わなければ現実として行われにくいからである。同じ20代だとしても、有職者であればそうした条件を満たしやすいが、学生では困難であり現実的ではない。したがって、この年代の挙式スタイルの選択意識には自分の理想や憧れが投影されやすく、列席者への配慮はあまり考慮されないのではないだろうか。一方、社会人となり、挙式予定の有無に依らず結婚及び結婚式が現実的なものとなるにつれて、結婚や挙式スタイルの選択は自分(たち)自身の意思だけで判断できないということが意識されるのではないか。

厚生労働省(2020)の『令和元年(2019)人口動態統計(確定数)の概況』によれば、平均初婚年齢は夫31.2歳、妻29.6歳であった。リクルートマーケティングパートナーズ(2020)の調査対象者、すなわち挙式者の年代は20代後半及び30代前半が多く、夫の平均年齢が30.3歳、妻の平均年齢が28.5歳であった。つまり30歳前後で結婚式に対する意識に変化が見られる可能性がある。30歳より以前では年齢が若いほどに個人の憧れが挙式選択に反映されやすく、30歳より以降は年齢が上がるほどに列席者(他者)に対する意識が挙式選択に反映されやすくなるのではないだろうか。

4. 若者の他者に対する意識⁽⁵⁾

若者は消費行動の際、他者を意識して行動を変化させる傾向にあると言われている。例

(5) ここでの議論の一部は松本、宮澤(2019)に基づく。

えば、William et al. (2010) は、1994 年以降の若者を Z 世代 (Generation Z) と定義したうえで、彼らの特徴として「仲間からの受容 (peer acceptance)」を重視することを挙げている。その影響は髪型や服装の選択などのスタイルに広く見られるという。児美川 (2013) もまた、「仲間への気遣い」「空気を読む」「仲間内での承認」といった表現で若者の他者とのかかわりについて言及している。

日本広告業協会 (2017) は若者の SNS の利用と消費行動に対する影響を詳細に分析している。結果として、若者には「よく見られたい」という意識と「自己アピールに見られたくない」という、相反するような意識が存在することが指摘されている。また、SNS 上での「自己顕示的商品購入」が若者に存在する可能性を指摘している。松本、宮澤 (2019) では、統計的な手法に基づき、若者世代が親世代よりも他者の存在を意識すること、また消費行動を他者に合わせて適切に変える傾向にあることを示した。

ただ、こうした他者を意識した消費行動の変化は、消費場面においてすぐそばに他者がいて自分の消費行動が観察されている場合や、消費行動の際に他者の存在を強く意識せざるを得ない場合にのみ生じると考えられる。

前節で指摘したように、結婚及び結婚式は平均初婚年齢よりも若いほどに現実的な問題として捉えられることはない。すなわち、若者に位置づけられる年代の学生は他の年代よりも強く他者を意識するが、挙式スタイルの選択は彼らにとって現実的な問題ではないため、列席者 (他者) を意識する可能性は低い。したがって、そうした列席者 (他者) に対する意識がそもそも生じることなく、個人の憧れの意識が挙式スタイルの選択に影響する可能性が高いと考えられる。

5. 本研究の仮説とリサーチクエスション

挙式スタイルの選択には、結婚式に対する個人の憧れの意識だけでなく、列席者に対する意識も反映される可能性がある。特に列席者に対する意識は、結婚式が現実的な問題として捉えられる年代になるにつれて、その影響力が高まるのではないかと。

一方で、先行研究において若者は他者を意識して行動を変化させる傾向にあることが言われている。そう考えると、挙式スタイルの選択において列席者への意識が強く働きそうに思える。しかし、若者、その中でも特に学生にとって結婚式は未来の話であり、眼前にある現実的な問題ではない。結果として、学生による挙式スタイルの選択では、個人の憧れの意識が影響する可能性が高い。

結婚式自体が非日常的なイベントではあるが、その中でもリゾートウェディングは増田 (2011) が指摘するように非日常性をより感じる挙式スタイルだろう。一方で、居住地近隣の挙式は、リクルートマーケティングパートナーズ (2020) での指摘にある通り、列席者の負担に配慮した挙式スタイルだろう。したがって、個人の憧れの意識が強く出るほどにリゾートウェディングが選択されるのではないかと。一方、列席者への意識が強く出るほどに居住地近隣の挙式が選ばれるのではないかと。

つまり、結婚や結婚式を現実の問題として捉えない学生では、居住地近隣の挙式は選択されず、リゾートウェディングが選択されやすいのではないかと。そして、平均初婚年齢よりも年齢が高い 30 代や 40 代では結婚や結婚式を現実の問題として捉えるため、リゾー

トウェディングは選択されず、居住地近隣の挙式が選択されやすいのではないかとすなわち、本研究の仮説を以下のように設定する。

H1a：挙式スタイルの選択意識を尋ねた場合、学生では居住地近隣の挙式を選ぶ人が全体の傾向よりも少ない。

H1b：挙式スタイルの選択意識を尋ねた場合、学生では海外または国内のリゾートウェディングを選ぶ人が全体の傾向よりも多い。

H2a：挙式スタイルの選択意識を尋ねた場合、30代では居住地近隣の挙式を選ぶ人が全体の傾向よりも多い。

H2b：挙式スタイルの選択意識を尋ねた場合、30代では海外または国内のリゾートウェディングを選ぶ人が全体の傾向よりも少ない。

H3a：挙式スタイルの選択意識を尋ねた場合、40代では居住地近隣の挙式を選ぶ人が全体の傾向よりも多い。

H3b：挙式スタイルの選択意識を尋ねた場合、40代では海外または国内のリゾートウェディングを選ぶ人が全体の傾向よりも少ない。

なお、20代の消費者の場合、社会人であるため、学生と年齢が近くとも学生とは異なる意識と、それに基づく挙式スタイルの選択傾向を示すことが予測されるが、平均初婚年齢である30歳前後には達していない人も多く含まれる。そのため、結婚や結婚式をどの程度現実的な問題として捉えているかの傾向を一律に判断するのは難しい。したがって、20代については、リサーチクエスチョンとして探索的に挙式スタイルの選択を検討する。

RQ：挙式スタイルの選択意識を尋ねた場合、20代では居住地近隣の挙式と、海外または国内のリゾートウェディングのいずれを選ぶ人が多い傾向にあるのだろうか。

以上の仮説とリサーチクエスチョンを検証するために、年代によって挙式形式の選択にどのような違いがあるのか、データを収集・分析することで確認する。

6. 分析に用いる変数の定義

本研究では、年代による挙式スタイルへの選択意識の違いを確認するため、分析の軸として年代区分を設定する必要がある。本研究では、学生、20代、30代、40代の4水準とした。学生とは高校生、大学生、大学院生、専門学校生を指す。学生には20代も含まれるが、20代の学生は学生の水準に含め、それ以外（有職者が中心）を20代と区分した。

学生という水準には年齢だけではなく職業の意味も含まれるため、本来ならば、20代、30代、40代という純粹に年齢のみで区分した水準と並列にすることには問題がある。しかし、本調査では、上述の通り、挙式スタイルの選択において列席者への意識が影響していることを想定しており、それを確認するためには学生を別水準として設定する必要がある。

分析軸には年代だけではなく、性別を加えた。結婚式は一般的に女性の方が憧れや理想を抱きやすいと考えられており、性別も挙式スタイルの選択に影響するのではないかと考えたためである。本研究では、性別を男性、女性の2水準とした。

挙式スタイルの選択については、海外のリゾートウェディング、国内のリゾートウェディング、居住地近隣のウェディングの3水準とした。具体的な質問項目と選択肢は表1の通りである。

表1：挙式スタイルの選択に関する質問項目と選択肢

あなたが結婚式を挙げるなら、以下のどのスタイルを選択したいですか？ 〈選択肢〉
1：海外のリゾートウェディング（ハワイやアジアのビーチリゾート、ヨーロッパなど）
2：国内のリゾートウェディング（沖縄、北海道、軽井沢など）
3：居住地近隣のウェディング（ホテルウェディング、ハウスウェディングなど）

データの収集にはインターネット調査を用いた。データ収集作業は楽天リサーチ株式会社⁽⁶⁾に依頼した。調査対象者の条件は首都圏（東京、千葉、埼玉、神奈川）在住の未婚の男女である⁽⁷⁾。調査実施時期は、2018年3月である。

最終的な有効回答は2782名であった。内訳は、男性・学生が616名、男性・20代が377名、男性30代が215名、男性・40代が190名、女性・学生が737名、女性・20代が298名、女性・30代が163名、女性・40代が186名である。なお、男性・学生の年齢の範囲は18歳から24歳、女性・学生の年齢の範囲は16歳から24歳である。全サンプルの居住地、職業の分布は表2、表3にまとめた。

表2：全サンプルの居住地分布

	度数	%
茨城県	28	1.0
栃木県	13	0.5
群馬県	9	0.3
埼玉県	462	16.6
千葉県	417	15.0
東京都	1172	42.1
神奈川県	681	24.5
合計	2782	100.0

表3：全サンプルの職業分布

	度数	%
会社員	915	32.9
会社経営／役員	8	0.3
自営業／自由業	121	4.3
公務員／団体職員	81	2.9
パート・アルバイト	225	8.1
学生	1353	48.6
その他	25	0.9
無職（働いていない）	54	1.9
合計	2782	100.0

7. 分析の手順と結果

性別2水準と年代4水準を組み合わせた8群と、挙式スタイルの選択意識3水準とのクロス集計表を作成した（表4）。このクロス集計表について、各群の度数が全体傾向と比

(6) 現在の社名は、楽天インサイトである。

(7) 学生群のうち、男性サンプルの収集において十分な数を確保するため、一部、北関東（茨城・栃木・群馬）の居住者が含まれる。

較して有意な偏りがあるのかを確かめるためにカイ二乗分析を実施した。その結果、0.1%水準で有意であった ($\chi^2=83.89$, $df=14$, $p<0.001$, Cramer's $V=0.12$)。続けて、残差分析を実施した。その結果、表4の網掛けのセルに有意差が認められた。以下、結果に基づき、仮説とリサーチクエスチョンを確認する。

まず、仮説1について確認する。男性・学生群は全体の傾向に比べて、居住地近隣を選択する人が有意に少なかった(居住地近隣: $r_{adj}=-3.34$, $p<0.05$)。女性・学生群も、居住地近隣を選択する人が全体傾向よりも有意に少なかった ($r_{adj}=-2.86$, $p<0.05$)。したがって、「学生では居住地近隣の挙式を選ぶ人が全体の傾向よりも少ない」という仮説1aは支持された。

一方、男性・学生群は、海外リゾートを選択する人は有意に少なかったものの(海外リゾート: $r_{adj}=-2.08$, $p<0.05$)、国内リゾートを選択する人が有意に多かった ($r_{adj}=5.42$, $p<0.05$)。女性・学生群では、海外リゾート、国内リゾートのいずれも有意差はなかった(海外リゾート: $r_{adj}=1.82$, $n.s.$, 国内リゾート: $r_{adj}=1.46$, $n.s.$)。以上の結果から、「学生では海外または国内のリゾートウェディングを選ぶ人が全体の傾向よりも多い」という仮説1bは一部支持された。

次に、仮説2について確認する。男性・30代群は、全体の傾向に比べて、居住地近隣を選択する人が有意に多かった ($r_{adj}=2.32$, $p<0.05$)。女性・30代群は、居住地近隣を選択する人は全体傾向との有意差は見られなかった ($r_{adj}=1.40$, $n.s.$)。したがって、「30代では居住地近隣の挙式を選ぶ人が全体の傾向よりも多い」という仮説2aは一部支持された。

一方、男性・30代群では、海外リゾートと国内リゾートを選択する人は全体の傾向と有意な差はなかった(海外リゾート: $r_{adj}=-1.04$, $n.s.$, 国内リゾート: $r_{adj}=-1.57$, $n.s.$)。女性・30代群では、海外リゾートを選択する人は全体傾向との有意差は見られなかったが ($r_{adj}=0.62$, $n.s.$)、国内リゾートを選択する人が全体傾向よりも少なかった ($r_{adj}=-2.04$, $p<0.05$)。以上の結果から、「30代では海外または国内のリゾートウェディングを選ぶ人が全体の傾向よりも少ない」という仮説2bは一部支持された。

続けて、仮説3について確認する。男性・40代群は全体傾向に比べて居住地近隣を選択する人が有意に多かった ($r_{adj}=4.22$, $p<0.05$)。女性・40代群でも居住地近隣を選択する人が全体傾向よりも有意に多かった ($r_{adj}=2.26$, $p<0.05$)。したがって、「40代では居住地近隣の挙式を選ぶ人が全体の傾向よりも多い」という仮説3aは支持された。

一方で、男性・40代群は、海外リゾート、国内リゾートを選択する人が有意に少なかった(海外リゾート: $r_{adj}=-2.50$, $p<0.05$, 国内リゾート: $r_{adj}=-2.32$, $p<0.05$)。女性・40代群は、国内リゾートを選択する人が有意に少なかった ($r_{adj}=-4.09$, $p<0.05$)。また、海外リゾートの選択については、5%水準で有意ではなかった ($r_{adj}=1.89$, $n.s.$)。女性・40代の海外リゾート選択においては有意差がなかったものの、女性・40代の国内リゾート選択が有意に少なかったこと、そして男性・40代では海外リゾート、国内リゾートの選択が有意に少なかったことから、「40代では海外または国内のリゾートウェディングを選ぶ人が全体の傾向よりも少ない」という仮説3bは支持された。

最後に、20代の選択傾向について確認する。男性・20代群では、居住地近隣、海外リゾート、国内リゾートのいずれにおいても、全体傾向との有意な違いは見られなかった(居住地近隣: $r_{adj}=-0.62$, $n.s.$, 海外リゾート: $r_{adj}=-1.17$, $n.s.$, 国内リゾート: $r_{adj}=1.69$,

表 4：性別・年代と挙式スタイルの選択意識に関するクロス集計

			海外リゾート	国内リゾート	居住地近隣	合計
男性	学生	度数	113	251	252	616
		期待度数	131.75	195.74	288.51	616
		%	18.30%	40.70%	40.90%	100.00%
		調整済み残差	-2.08	5.42	-3.34	
	20代	度数	72	134	171	377
		期待度数	80.63	119.79	176.57	377
		%	19.10%	35.50%	45.40%	100.00%
		調整済み残差	-1.17	1.69	-0.62	
	30代	度数	40	58	117	215
		期待度数	45.98	68.32	100.70	215
		%	18.60%	27.00%	54.40%	100.00%
		調整済み残差	-1.04	-1.57	2.32	
40代	度数	27	46	117	190	
	期待度数	40.64	60.37	88.99	190	
	%	14.20%	24.20%	61.60%	100.00%	
	調整済み残差	-2.50	-2.32	4.22		
女性	学生	度数	175	250	312	737
		期待度数	157.63	234.19	345.19	737
		%	23.70%	33.90%	42.30%	100.00%
		調整済み残差	1.82	1.46	-2.86	
	20代	度数	80	71	147	298
		期待度数	63.73	94.69	139.57	298
		%	26.80%	23.80%	49.30%	100.00%
		調整済み残差	2.43	-3.12	0.91	
	30代	度数	38	40	85	163
		期待度数	34.86	51.79	76.34	163
		%	23.30%	24.50%	52.10%	100.00%
		調整済み残差	0.62	-2.04	1.40	
40代	度数	50	34	102	186	
	期待度数	39.78	59.10	87.12	186	
	%	26.90%	18.30%	54.80%	100.00%	
	調整済み残差	1.89	-4.09	2.26		
合計	度数	595	884	1303	2782	
	期待度数	595	884	1303	2782	
	%	21.40%	31.80%	46.80%	100.00%	

注：網掛けのセルは残差分析の結果が5%水準で有意。

n.s.)。女性・20代群では、居住地近隣の挙式については、全体傾向との有意な差は見られなかった ($r_{adj}=0.91$, *n.s.*)。リゾートウェディングの選択については、海外リゾートを選択する人が全体傾向よりも多かった ($r_{adj}=2.43$, $p<0.05$)。一方、国内リゾートを選択する人が全体傾向よりも有意に少なかった ($r_{adj}=-3.12$, $p<0.05$)。

8. 考察

本研究の結果から、男性か女性かに依らず、学生は居住地近隣を選択する人が少ない傾向にあることがわかった。またリゾートウェディングの選択については、学生・男性群は国内リゾートウェディングを選択する人が多い傾向にあることがわかった。以上の結果から、仮説導出の際に想定したように、学生の挙式スタイル選択では、その他の年代に比べ

て、列席者への意識よりも個人の憧れや理想が反映されやすい可能性がある。

学生と年齢的には近い男性・20代、女性・20代による挙式スタイル選択の傾向は、学生のそれとは異なっていた。男性と女性ともに、居住地近隣の挙式の選択において全体傾向との違いは見られなかった。居住地近隣の挙式選択において、年齢的に近い20代で全体傾向との差がないことを踏まえれば、学生において全体傾向よりも有意に少なかったことは、学生特有の傾向と捉えることができる。なお、居住地近隣の挙式の選択については、30代、40代では全体傾向に比べて差がないか、あるいは選択する人が多い傾向にあった。このことから、居住地近隣の挙式の選択では、明確に年代による違いが見られた。平均初婚年齢である30歳前後を境に、挙式選択に与える列席者への意識の影響力が増す可能性を示す結果だと解釈できる。

リゾートウェディングの選択について、20代では男性と女性で傾向の違いが見られた。男性・20代では、国内と海外のいずれも全体傾向との違いはなかったが、女性・20代では国内リゾートは有意に選択する人が少ない一方、海外リゾートを選択する人は有意に多かった。一般に女性の方が男性よりも結婚や結婚式に対する思い入れは強いと考えられる。リゾートウェディングでも国内よりも海外の方が、より非日常性は高いだろう。女性においては、20代という平均初婚年齢よりも若い場合、列席者への配慮を意識する人がいる一方で、挙式に対するより強い憧れを抱く人も他の世代よりも多くいる可能性がある。

なお、同じ20代でも男性・20代群では女性・20代群のような強い憧れに基づく選択傾向はみられない。年齢的に近い男性・学生群では海外リゾートを選択する人は有意に少ない一方で、国内リゾートを選択する人は有意に多かった。これらの結果からは、結婚や結婚式に対する憧れの意識が女性と男性とでは異なることが示唆される。

リゾートウェディングの選択について、男女ともに40代では国内と海外ともに選択する人が少ない傾向が結果に表れていた。それに比べると、30代では、女性における国内リゾートの選択においてのみ選択する人が少ない傾向が見られた。上述したように30代、40代では居住地近隣の挙式を選択する人が多いことも合わせると、これらの結果からは、平均初婚年齢である30歳を超えると結婚や結婚式を現実的な問題として捉え、結果として列席者への配慮の意識が強く働く可能性が示唆された。

9. 学術的示唆と実務的示唆

本調査の結果からは、性別と年代によって挙式スタイルへの選択意識が異なることが示された。特に、学生はその他の年代に比べて、居住地近隣での挙式を選択せず、リゾートウェディングを選択する傾向にあること、平均初婚年齢よりも上である30代、40代はリゾートウェディングを選択せず、居住地近隣の挙式を選択する傾向にあることが確認された。

こうした結果からは、挙式選択に影響する要因として、結婚式への個人の憧れや理想の意識と、列席者への意識とがそれぞれ影響することが示唆された。年齢による立場や家計状況といった変化が、個人の憧れの意識と、列席者への意識の優先順位に影響するのだと考えられる。具体的には、平均初婚年齢よりも若いほどに挙式への憧れの意識が強く影響し、30歳を超えると列席者への意識が強く影響する可能性がある。

本研究の学術的示唆は、挙式選択において列席者への意識が影響する可能性をデータに

基づき検証したことである。増田(2011)やリクルートマーケティングパートナーズ(2020)で列席者への意識が影響することは示唆されていたが、それらとは別の視点でデータを収集し、新たな根拠を示した。また本研究では、挙式スタイルの選択に列席者への意識が働くことだけではなく、その影響が年代によって異なる可能性も示した。特に、平均初婚年齢よりも上の30代、40代では列席者への意識が強く影響する可能性がある。一方、一般的には若者では他者に対する意識が強く影響するにも関わらず、学生ではそもそも挙式スタイルの選択で列席者への意識がなされず、そうした他者への意識が影響しない可能性を示せたことも意義がある。

このような、年代の違いによって挙式選択における列席者への意識の影響が異なる可能性は、実務の場面においても示唆があるだろう。ウェディングプランナーは挙式の相談にきたカップルの年代によって、挙式スタイルに重視する点が異なることに注意するべきである。若年層ほど個人の憧れが選択意識に反映されやすく、平均初婚年齢よりも上であるほど、挙式する本人たちの意識ではなく、列席者への意識が反映されやすい可能性がある。

年代による挙式選択意識の違いに配慮することができれば、ウェディングプランナーは多くの挙式予定者にとって良き相談者になれるかもしれないし、挙式予定者の納得するプランにたどり着きやすくなるかもしれない。すでに多くのウェディングプランナーが、業務経験から年代によって挙式選択意識の違いがあることを認識しているかもしれないが、その認識に対して根拠を与えたことに本研究の意義があるだろう。

10. 本研究の限界と今後の課題

本研究には限界も存在する。まず、本研究では年代による挙式スタイル選択の違いについて、その背景に列席者への意識と、結婚式に対する個人の憧れの意識が働くことを想定した。また、本調査の結果はそれを示唆するものではあった。しかし、本研究では直接、これらの意識を測定し、その影響を検証していない。これらの意識が確かに影響していることを検証するためには、そうした意識を概念として直接測定し、挙式スタイル選択との因果関係を検討する必要がある。

年代が上がるにつれて居住地近隣での挙式を選択する傾向の背景には、列席者への意識以外にも影響要因があるかもしれない。例えば、本研究の結果では40代はその他の年代よりも顕著に居住地近隣の挙式を選択し、リゾートウェディングを選択しない傾向が見られた。40代での結婚は平均初婚年齢に比べると10歳かそれ以上高い。単に列席者への意識だけでなく、いわゆる「世間体」と言われるような、列席者以外の幅広い周囲の人からの視線も意識し、あまり目立たない挙式選択をする可能性も考えられる。

学生についても、本研究では列席者への意識が働かないことで、挙式選択には自己の憧れがより強く反映されると考えた。そうした可能性は高いと考えるものの、一方で、日本広告業協会(2017)の指摘するような、他者に対する自己顕示的行動としてリゾートウェディングが選択された、あるいは居住地近隣の挙式を選択しなかった可能性もある。

本研究で示唆されたように、挙式選択には他者の存在が意識されやすいと考えられる。ただ、この他者の存在は、挙式選択の場合、親や親族の列席者、友人の列席者、同僚の列席者という具合に列席者にも多様な他者が含まれ、さらには結婚式に列席しないが、結婚

式を実施したことを伝える周囲の人の存在も考えられる。本研究では、挙式選択に最も影響するだろう列席者としての他者の存在に注目したが、この他者の範囲を分類または拡張して検討することは、挙式選択に対する影響要因の深い理解につながると考える。

海外リゾートウェディングと国内リゾートウェディングの選択傾向の違いに関しても今後検討すべきである。本研究では、居住地近隣の挙式との対比を意識して、それらを区別せずにリゾートウェディングとして仮説検証を行ったが、分析結果ではそれぞれの選択傾向が少しずつ異なっていた。特に、女性による海外リゾートの選択については、全世代において度数が期待度数よりも上回っていた。それは男性全体の傾向とは異なっていた。また女性全体の国内リゾートの選択傾向とも異なっていた。本研究では、女性・20代以外では有意差が確認されなかったため、女性による海外リゾート選択の傾向を明確に示すことはできなかったが、女性における海外リゾートウェディングの選択意識は、今後の研究対象として検討に値するだろう。

調査上の課題としては、職業の影響への考慮が挙げられる。本研究では年代区分として学生を設定したが、学生には職業としての意味も含まれる。結果として、学生では他の年代とは異なる特徴的な挙式選択傾向が見られた。そうだとすれば、職業やそれに関連する所得などが挙式選択意識に影響する可能性が考えられる。職業区分の統制を検討することも、挙式選択への意識の違いを検討する際に必要だろう。

本調査のサンプルでは、現在、結婚を意識する相手の有無を検討できていない。本研究で想定した通り、結婚を意識する相手の有無は、挙式スタイルの選択意識に影響する可能性が高い。今回の結果をより精緻に確認するためには、この点についても今後は統制すべきであろう。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費・基盤研究 (C) 16K02081 の助成、千葉商科大学経済研究所助成 (2016年-2017年) を受けたものです。

〔参考文献〕

- 児美川孝一郎(2013)「若者の消費行動に見る日本社会の未来形：『モーレッツからビューティフルへ』からの『平凡な日常』」『AD STUDIES』Vol. 43、10-15頁。
- 厚生労働省(2020)『令和元年(2019)人口動態統計月報年計(概数)の概況』、厚生労働省。
- 増田榮美(2011)「リゾートウェディングを志向する消費者傾向の分析」、上田女子短期大学、『上田女子短期大学紀要』、第34号、143-160頁。
- 松本大吾、宮澤薫(2019)「同伴他者が若者の消費行動に及ぼす影響：学生とその親世代に注目した探索的研究」、千葉商科大学経済研究所、『国府台経済研究』、第29巻、第1号、73-93頁。
- 日本広告業協会(2017)『若者の消費実態を探る～メディアとデバイス、買物に関する意識と行動から～調査研究報告書』、日本広告業協会。
- リクルートマーケティングパートナーズ(2020)『ゼクシィ結婚トレンド調査2020首都圏

版』、リクルートマーケティングパートナーズ。

Williams, Kaylene C., Robert A. Page, Alfred R. Petrosky, and Edward H. Hernandez (2010), "Multi-Generational Marketing: Descriptions, Characteristics, Lifestyles, and Attitudes," *Journal of Applied Business and Economics*, Vol. 11, Issue 2, pp. 21-36.

(2021.1.26 受稿, 2021.3.15 受理)

〔抄録〕

現在の結婚式の挙式スタイルとして最も一般的なものは、居住地近隣の専門式場やホテルで実施することである。一方で、ハワイなどの海外リゾート地や、沖縄や軽井沢などの国内リゾート地など、居住地とは異なる場所での結婚式、いわゆるリゾートウェディングを選択するカップルもいる。それぞれの挙式スタイルを選択する人とはどのような人なのだろうか。

挙式実施者を対象とした既存の調査報告や先行研究を踏まえれば、挙式スタイルの選択には、単に挙式をする本人たちの意思だけではなく、列席者や親などの他者の存在が影響することが分かる。ただし、こうした列席者や親などの他者の存在は、実際に挙式する予定がある場合はもちろん、いわゆる「結婚適齢期」と呼ばれるような年齢に近づいた場合など、自分の結婚や結婚식을現実的に想像する状況になって初めて意識されることだと考えられる。

平均初婚年齢が30歳前後であることから、それよりも年齢が若いほど結婚を現実の選択として意識せず、一方、30歳以降であるほどに結婚を現実のものとして意識する可能性がある。すなわち、年代によって意識の差があり、結果として挙式スタイルの選択が異なる可能性があるのではないだろうか。

以上のような問題意識のもと、年代によって挙式スタイルに対する選択意識が異なるのかを、消費者を対象に収集したデータに基づき確認する。特に、結婚や結婚식을現実的なものとして捉えることがないと考えられる学生に注目し、その他の年代（20代、30代、40代）と挙式スタイルの意識の違いがあるのかを確認する。

消費者を対象に挙式スタイルの選択に関する調査を実施、有効回答2782名のサンプルを得た。当該データの分析の結果、学生は他の年代よりも居住地近隣での挙式を選ばない傾向にあることが分かった。一方、30代、40代では居住地近隣での挙式を選ぶ人が多い傾向にあった。これらの結果は想定した通りであり、このことから、挙式スタイルの選択には列席者に対する意識が影響しており、年代が上がるにつれて、その影響の程度が強まる可能性が示唆された。